



Title	日本語でのthe Korean languageの「呼称問題」の問題を考える：知と情の相克を超えて
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102292
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語での the Korean language の「呼称問題」の問題を考える — 知と情の相克を超えて —¹

植田 晃次

1. はじめに

§ 1 前提

ここではまず、前提を確認しましょう。副題にあるように、この問題は「知」のレベル、すなわち「論理的思考の話」と、「情」のレベル、すなわち「個々人の感情の話」が同一平面上でごちゃごちゃに論じられることによって、議論が混乱しているというのが私が見るところの現状です。今日は、明治維新以降、日本人がこの言語(the Korean language)を日本語でどのように呼んできたのかを概観した後、混乱の要因を整理し、各自がこの問題を考える道筋を整理できればと考えています。話の途中で違和感を感じされることもあるかと思います。その際、立ち止まって、それは「知」の問題か「情」の問題かを確認することが肝要かと思います。

この言語の呼称について、これまでさまざまに主張されたり、あるいは議論されてきました。「主張する」という行為と「議論する」という行為の違いについても注意していただければと思います。

呼称問題に関して、基本的には植田(2002、2012)、内山(2004、2012、2022)で論点はほぼ論じ尽くされていると考えます。しかし、その後も議論の繰り返しや蒸し返しが散見されるのはご承知の通りです。その基本的な特徴は、すでに行われた議論を踏まえず、主張がなされるということかと思います。

§ 2 本講演の趣旨

このような現状で、今日のお話はある呼称の「正しさ」を追及したり、それを提示しようと/orするものではありません。そもそも呼称に「正しい」とか「おかしい」・「まちがっている」という概念はそぐわないということです。

¹ 本稿は日本韓国研究会第9回研究例会(2025年3月16日、於大阪公立大学中百舌鳥キャンパス)でのミニシンポジウム「日本語で朝鮮語、韓国語、コリア語、ハングル…といわれる言語をどう呼ぶか」の講演原稿にレジュメの内容の一部を組込み改稿したものである。講演の機会をお与えくださったのみならず、本誌への掲載をご快諾くださった日本韓国研究会運営委員会、司会の飯倉江里衣先生、コメンテーターの高橋梓先生・閔東暉先生をはじめとし、準備や当日の運営にあたってくださった諸先生、多くのコメントを賜った参加者のみなさまに感謝申し上げます。なお、紙幅の制限により、PPTで提示した資料のほとんどやコメンテーターお二方からのコメント、質疑応答に関する内容を残念ながら反映できなかった。

先行研究に隨時触れながら、上述のように、この言語の呼称問題の要因を整理し、みなさんおひとつおひとつがこの問題を考える道筋を整理することを目指します。また、この言語の教育に関わっておられる方も多いかと思いますので、特に教育という営為において呼称問題をどのように考えるかという手掛かりの一端を提供できればと思います。

§ 3 頭の体操

ここで頭の体操です。次の引用をご覧ください。呼称について2つの言説を挙げてみました。まずこれに2分間で目を通してください。そして、内容がすへっと入ってくる箇所、違和感を感じる箇所がないかを少し考えてみてください。

1つ目は近年韓国現代小説の翻訳で有名な斎藤真理子先生、2つ目は小平の朝鮮大学校の教員の金成樹先生のものです。いずれも真摯に書かれたものと思います。

「最初に断っておくと、本書のサブタイトルは「韓國語と日本語のあいだ」だけど、私はこの本で扱う言語のことを韓國語とも呼び、朝鮮語とも呼び、どちらかに揃えることはしていない。／現在、この言語は大韓民国(韓国)では韓國語、^{だいかんみんこく}朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)では朝鮮語と呼ばれる。また、韓国でも北朝鮮でも、「우리말(「私たちの言葉」という意味)」と呼ぶことがある。英語なら Korean で済むが。／日本の学問の世界では、朝鮮半島を中心を使われてきた言語であるから朝鮮語と呼ぶのが一般的だ。わたしもふだん、この言語の特徴や学習方法などについて話すときには朝鮮語と言っている。／一方で、私が今、翻訳しているのはほとんどが韓国で書かれている文学作品だ(一部、かつて日本が朝鮮半島を植民地にしていたころに書かれたものも含む)。だから、「韓國語」という呼び方もごく自然に使う。／ちなみに韓国では「朝鮮」という言葉は、中世・近世の「朝鮮時代」などを指す歴史用語で、^{ひんぱん}頻繁に使う言葉ではない。また、「朝鮮」という言葉は、韓国に住む人や、韓国から日本へ来て間もない人が聞くと、日本による植民地時代のイメージと結びついて悪印象を生み出すことがあると知っておこう。／大事なのは、朝鮮語、韓國語と違う呼称で呼ばれていても、それらは同じ言語だということだ。社会体制のちがいによって同じものを指す言葉が異なったり、一部の発音にちがいがあったりはするが、南北それぞれに住む人どうしで、言葉が通じないなどということはまず、ない。／そして、韓國語と言ってもよいし朝鮮語と言ってもよいこの言語と文字に私が出会ったのは、1980年夏のことだった。出会ったときには私も周囲の人も全員朝鮮語と呼んでいたので、ここでは朝鮮語で話を進めよう。」²(斎藤 2024:12-13)

「さて、そもそも朝鮮語とはどのような言語でしょうか？／朝鮮語はその名のとおり朝鮮民族のことばです。朝鮮半島と米国・中国などで約700万人の母語話者がおり、これは7000以上ある世界の言語のうち15番目ぐらいに多い数です。／近年、日本では「韓國語」という呼称が増えていますが、これは大韓民国(以下、韓国)という国家に結び付いたもので朝鮮語の実態とかなり異なったものを想い起こさせます。ドイツ語がオーストリアやスイスの言語を含むのと同様に、言語名と国家名(国号)は必ずしも一致しません。／朝鮮民主主義人民共

² ルビも原文のママ。ただし、ウリマルのルは下付=(縦書のため)右付のルに見える。

共和国(以下、共和国)と韓国のことばは、世界的に見ても別言語とするほど違っているとは言い難いです。ただし、朝鮮半島に2つの国家が並立しており、それぞれに「国語」を制定しているという意味で、朝鮮語は「平壤文化語」(共和国)と「ソウル標準語」(韓国)という2つの標準語を持つ言語と言えるでしょう。」(金成樹 2025:29)

この引用から浮かんだであろう疑問を念頭に、以下お話を進めていこうと思います。

2. 日本人は日本語でこの言語を何と呼んできたのか

§ 1 「旧朝鮮語学」³の学習書類での呼称

「旧朝鮮語学」とは、大雑把に言って、明治維新以降1945年までの言語運用(朝鮮語+朝鮮文)の習得を目的とした学習・教育のことです。当時の人々が実際にこの言語を何と呼んでいたのかを、明確に提示することは困難ですが、手掛かりとして学習書類での呼称を見てみましょう。1881(明治14)年出版御届の『韓語入門』・『日韓善隣通語』(ともに宝迫繁勝)から、1943(昭和18)年発行の『朝鮮語教科書』(朝鮮総督府警察官講習所)まで144タイトルが確認されています⁴。数え方にもありますが、その後の調査ではもう少し多いかと思われます。これらに現れた呼称を時期別にまとめたものが表1です。第Ⅰ期は大韓帝国成立、第Ⅱ期は韓国併合が切れ目になっています。第Ⅰ期は韓・韓語と朝鮮・朝鮮語が半々ぐらい、第Ⅱ期は韓・韓語が優勢、第Ⅲ期は韓・韓語がなくなるとともに、朝鮮・朝鮮語の増加に加え、鮮・鮮語が台頭します⁵。

	韓・韓語	朝鮮・朝鮮語	鮮・鮮語	その他	計
第Ⅰ期 1880~1897	14	11	0	5	30
第Ⅱ期 1898~1910	37	4	0	2	43
第Ⅲ期 1910~1945	0	40	24	1	65
計	51	55	24	8	138

表1 旧朝鮮語学の学習書類での呼称の分布⁶

この中には、使いまわし本があります。使いまわし本というのは、1冊目の本の内容をそのまま流用して新しい本を作ったものを指します。たとえば、金島苔水の学習書の1つは『対訳日韓新会話』(1905)→『対訳朝鮮語新会話』(1929、18版)→『三ヶ月卒業日鮮語新会話』(1932)のように使いまわされています⁷。使いまわし本ですから、内容は基本的に同じですが、書名が変更されています。このようなケースは現代でも見られます。これについては記述内容と関連して3章§4(4)で後述します。

³ この概念については、矢野(2012)参照。

⁴ 植田(2007:124-131)[執筆は山田寛人]

⁵ 具体的な書名は植田(2007:124-131)[執筆は山田寛人]参照

⁶ 植田(2007:100)[執筆は山田寛人]の表1のレイアウトを一部改。6冊の合計の差は集計時期のずれによる。

⁷ 詳細は植田(2014)参照。共著書も含む。

また、活字というものは、組んだままおいておくことができませんので、増刷や使いまわし本を印刷する際には、活字を組み直さない場合、活字の型を紙でとりそれを保管しておき、必要になれば鉛か何かを入れて版を作つて新たに印刷するということが行われていたようです。修正が必要になれば、その部分だけ修正して印刷するということも行われていました。単純な誤字・脱字や誤りの修正のほか、言語名を差し替えたりするということも行われていました⁸。朝鮮語学習書では、笛山章の『新案韓語栢』(1910年)が『新案独学鮮語自在』(1916年)になった際、朝鮮語例文で「新案韓語栢」は「신안한어간」と表記の変更に止まるものの、「한어」を「선어」に差し替えた上で、日本語訳で「新案韓語栢」を「此ノ本」に、「韓語」を「鮮語」に差し替えてます(前者120-121頁、後者180頁)⁹。ただし、前述のように、「선어」とあるからと言ってそのように口頭で呼んでいたかはより慎重に検討する必要があるかと思います。

§ 2 1945年以後の学習書類での呼称¹⁰

次に「戦後」(1945年8月15日以降)の学習書類での呼称を見てみましょう。表2は1950年代から単純に10年刻みで学習書の発行件数をまとめたものです。

年代	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020
件数	25	9	61	164	156	533	789	187

表2 学習書類の刊行件数(1945~2022.3)〈2020年代は1~3月の3か月〉

「戦後」最初に公刊された朝鮮語学習書は、1951年の“A First Book of Korean([英和対照]朝鮮語入門)”(Lee Eun、Blyth R. H.、北星堂書店)と思われます。しかしこの本は韓国駐屯国連軍のための入門書として英語で書かれたもので¹¹、1952年の『朝鮮語入門』(梶井陟、日朝協会)が日本人が日本語で書いた学習書の嚆矢と思われます。しかし、この本も限られた範囲で使われた謄写版です。次は1954年の『新らしい朝鮮語の学習』(宋枝学・梶井陟)ですが、学友書房から刊行されたものであり、大手出版社から刊行され誰もが簡単に入手できる学習書としては1957年の『基礎朝鮮語』(宋枝学、大学書林)が最初ということになります。『新らしい朝鮮語の学習』と『基礎朝鮮語』の宋枝学は帰国運動の際、新潟から日本海を渡った人物です。その後もいくつかの学習書が刊行されますが、1963年の『朝鮮語四週間』(石原六三・青山秀夫[河野六郎監修]、大学書林)、1971年の『わかる朝鮮語〈基礎・実力編〉』(梶井陟、三省堂)が中では広く普及したものであろうと見なせます。韓国語という呼称が最初に使われた、広く市販される初の学習書は、1970年の『六カ国語会話 第3(日本語, 英語, 韓国語, 中国語, 中国(廣東)語, タイ語)』(日本交通社)と見られますが、会話用ポケットブックで、同年の『韓国旅行会話 3時間』(張暁、三修社、原物未確認)が続くようです。本格的な学習書としては、1972年の『標準韓国

⁸ 本段落のここまででは、植田(2014)参照。

⁹ 笛山とその学習書に関しては、植田(2018a)参照。

¹⁰ 原則として、植田(2024)のデータと植田(2022)によるが、その後の成果に基づき一部補訂した。

¹¹ 植田(2022:45)

語 I』(朴成媛[李崇寧 監修]、高麗書林)になるかと思われます。その後、NHK の語学講座開設(1984)、アジア大会(1986)、ソウルオリンピック(1988)、韓国映画ブーム、冬のソナタブーム(2003)等を経て K-pop が入ってくることになります。植田(2022:46)によれば、2000 年以降に一般的な出版物として発行されたテキスト 16 のうち、書名に朝鮮語を用いて新たに刊行されたもの(新版・改訂版などは除く)は、『至福の朝鮮語』(朝日出版社)・『聴いて覚える初級朝鮮語』・『書いて覚える中級朝鮮語』・『しくみで学ぶ初級朝鮮語』・『しくみで学ぶ中級朝鮮語』(以上、白水社)の 5 冊にとどまります。ただし、2000 年には『基礎から学ぶ朝鮮語』(昭和堂)、2005 年に『朝鮮語』(朝鮮青年社)も出ていますので 7 冊となります。

次に、テキストにおける呼称の選択状況を見てみましょう。2000 年以降に日本で刊行された朝鮮語テキスト 60 冊を対象に、まず書名を基準に分類し、副題、「はじめに類」をクロスさせて分類・集計した結果が表 3 です。

書名	副題	はじめに類	冊数	
韓国語		韓国語	26	37
	—	韓国語	5	
	한국어	韓国語	3	
	Corean	韓国語	1	
	—	—	1	
		—	1	
—	韓国朝鮮語	韓国朝鮮語	5	9
	韓国語	韓国語	3	
	韓国朝鮮語	—	1	
ハングル	韓国語	韓国語	1	6
	韓国朝鮮語	韓国朝鮮語	1	
		韓国・朝鮮語	1	
		韓国語	1	
	—	韓国語	1	
		朝鮮語、朝鮮語=韓国語	1	
朝鮮語		朝鮮語	3	3
コリア語		コリア語	2	2
コリアン	韓国語	韓国語	1	1
Korean	韓国語	韓国語	1	1
HANGUL		韓国語	1	1
計			60	60

表 3 書名・副題・はじめに類での呼称¹²

¹² 植田(2022:46—47)の表 1 から「テキスト番号」を除き整えたもの。—は書名／副題に言語名が含まれない

書名を見れば、韓国語(37)>言語名なし(9)ハングル(6)>朝鮮語(3)>コリア語(2)>コリアン・Korean・HANGUL(各 1)の順になっています。ここで興味深いことは、書名と副題あるいははじめに類で呼称が合致していない場合が散見される点です。ただし、ここには2008年の『学ぼう韓国・朝鮮語』が含まれていないため、実際にはさらに韓国・朝鮮語を書名に入れたテキストもあることになります。

3. 考えるための手がかり

§ 1 他の言語での呼称

この言語は、英語では the Korean language、ロシア語では корейский язык、モンゴル語では солонгос хэл と呼ばれており、呼称は基本的に1つです。一方、ベトナム語では tiếng Hàn, tiếng Triều Tiên、「中国語」—この呼称には後述のように議論がありますが、便宜上このように呼んでおきます—では朝鲜语、韩国语、韩语、韓國語、韓語などと複数の呼称が使われています。

中国語の例では、『朝鲜语实用语法』(1978→1986 第2次印刷)→『韩国语实用语法』(1995→2006 新篇)→『韓語實用文法大全』(2015)、『朝鲜语基础语法』(1994)→『韩国语基础语法』(2005)のように、旧朝鮮語学の使いまわし本のような例も見られます¹³。

中国語やベトナム語、また日本語での呼称が複数であることには漢字が介在していることは言うまでもありません。そのほか、普通话の場合ですが、韩国语より韩语のほうがより実用的な話すことばを指す傾向があるということも指摘できるでしょう。漢字の問題については、§ 3(2)で触れることにします。

§ 2 前提

(1)言語の同質性と複数規範の存在

冒頭の頭の体操で見た2つの言説にもあったように、大雑把に言って、南北朝鮮の(さらには中国朝鮮族の)¹⁴言語は規範に若干の差異はあるものの、基本的に同一言語であると見て支障ないでしょう。文在寅と金正恩の間には通訳はいなかったのに対し、文在寅とD.トランプやV.プーチン、また、金正恩とD.トランプやV.プーチンの間に通訳がいたことからも明らかでしょう。

さらに言えば、12年前のものですが、「国連事務総長、韓国語で金正恩氏に呼び掛け」という記事があり「北朝鮮が挑発行為を強める中、国連の潘基文(パンギムン)事務総長はCNNとの独占インタビューの中で、金正恩(キムジョンウン)第1書記に対し、米国への挑発よりも自国民の現状を向上させることに焦点を当てるよう韓国語で呼びかけた。(略)」とあります¹⁵。潘基文が呼び掛けた「韓国語」は金正恩にそのまま通じると想定されていることがわかります。

みなさんが、ソウルに行っても、平壌に行っても、延吉に行ってもそこで行われている the Korean language が理解でき、通じるでしょう。

こと、斜線は副題がないことを表す。

¹³ 詳細は植田(2016)参照

¹⁴ 中国の規範については、植田(2018b)参照。

¹⁵ CNN.co.jp (2013年4月12日) <https://www.cnn.co.jp/world/35030795.html> (2025.3.3 最終接続)

(2)大韓民国国務院公示第7号(1950.1.16「国号および一部地方名と地図の色の使用に関する件」

2章で見た「戦前」の学習書類の書名で見る限り、日本語による呼称として韓国語(韓語ではないことに注意してください)という呼称は見られませんでした。それでは、この呼称はどのような要因から広く一般化したのでしょうか。

この公示は以下の通りです¹⁶。官報に掲載された原文は漢字交じり文の朝鮮語です。

「1. 我が国の正式国号は「大韓民国」であるが、使用の便宜上、「大韓」あるいは「韓国」という略称を使うことができるものの、北韓傀儡政権との確然たる区別をなすために、「朝鮮」は使用できない。／2. 「朝鮮」は地名としても使用できず、「朝鮮海峡」、「東朝鮮湾」、「西朝鮮湾」などは、各々「大韓海峡」、「東韓湾」、「西韓湾」などとなおして呼ぶ。(後略)」

ここでは、漢字交じり文の朝鮮語のなかで、漢字で表記された固有名詞を(日本漢字音ではなく)朝鮮語として朝鮮漢字音で読む必要があることに注意する必要があります。

なお、言語の呼称や固有名詞が変わる際、自然な変化と人為的な変化があるでしょう。この公示による変更は強制力を伴う、いわば人為的なものにあたるでしょう。昨年1月の朝鮮民主主義人民共和国における対南政策の変更で従来の남조선(南朝鮮)が한국(韓國)に変更されたのも類例と見なすことができます。

(3)複数の呼称

ある事物・事象に複数の呼称がある事例は枚挙にいとまがありません。ピーナッツは南京豆とも言いますし、関西でカサゴと呼ぶ魚は九州ではアラカブやガラカブと呼ぶかと思います。このとき、自分がどちらをよく使うのかということはあるでしょうが、南京豆が正しくてピーナッツは正しくないとはふつう言いませんし、思いません。言語の呼称についても同様のことが見られます。スペイン語とイスパニア語、ビルマ語とミャンマー語、グルジア語とジョージア語などはどのような背景に基づくかによる違い、ベトナム語とヴェトナム語、ロシア語とロシヤ語などは表記法上の違い、また、中国語と漢語と華語などは漢字が介在するとともに、概念の若干の違いを含む違いと言えるかと思います。南京豆と違って、言語の呼称に関しては、とくに3番目の部類の呼称については、正しい／正しくないとか、こう呼ぶべきだ／呼ぶべきでないという主張や議論がなされることがあります。そしてそれは繰り返される、あるいは蒸し返されることが散見されます。次の§3では、その要因を考えてみることにします。

§3 議論が繰り返される／蒸し返される要因

(1)言語と民族・国家の関係観

日本語での言語の呼称は、多くの場合エスニシティを表す語+語という構造になっています。例えば、日本+語→日本語というようにです。社会言語学の考え方では、言語は国家ではなく民族とより密接な関係にあるととらえます。言い換えれば、言語の分布は国の境によって区切られないという考え方です。§4で触れる田中克彦という社会言語学者が『ことばと国家』(岩波新書)の中でこのような見方を提起し、一定の影響があったと思います。この考え方に基づけ

¹⁶ 句読点を補い拙訳した。当時は、より正確に理解するために官報に掲載された原文を提示した。

ば、言語というものの性質から、国家名+語という呼称はそぐわないということになります。たとえば、メキシコ語、カナダ語、オーストリア語、オーストラリア語などと同様に、中国語、韓国語という呼称もそぐわないという考え方です。中国語・韓国語はとくに「国(ごく／こく)」が入っているのでより明示的であるといえるでしょう。ただし、これについては、語の多義性から、中国・韓国は国名(の略称)ではなく、総称としても使われるという点からの批判もあります¹⁷。

韓国のことばなので韓国語という主張に対して、北朝鮮—これは正式国名の略称ではなく地域名ですが、国名のように認識されている節があるのでここで言及します—北朝鮮のことばは北朝鮮語かという問い合わせを設定してみることも考えるヒントになるでしょう。ただし、ルクセンブルク語のように、国家を枠とした呼称やブラジルのポルトガル語がブラジル語と呼ばれることがあるといった事例も念頭に置く必要があるかもしれません。

韓国語という時の「韓国」はどうも国名の略称であるらしいことは、「朝鮮半島で使われている言語の名称は、「韓国語」「朝鮮語」「コリア語」など、様々な名称で呼ばれています。このテキストで扱っている言葉は主にソウルを中心とした韓国(大韓民国)で使われている言葉ですので、「韓国語」と呼ぶことにします。」¹⁸という類の言説から推察されます。また、「日本韓国語教育学会は日本で初めて名称に「韓国語」が入る学会として、2009年に日本の大学で韓国語教育に携わる大学教授らにより設立されました。」¹⁹という文言にはこの学会が対象とする言語は「朝鮮語」ではなく、「韓国語」であるという強い主張が読みとれるでしょう。その延長線上には、大韓民国領域外の the Korean language は視野に入らない、あまり入らない、あるいは差異を強調することによって異なる言語という見方をとることにまで繋がっていると考えられます。

(2)漢字の惑わし・偽りの友

私は「漢字の惑わし」と呼んでいますが、内山先生の論考では「偽りの友」と呼ばれる概念にも注意する必要があるでしょう。大雑把に言えば、漢字文化圏の言語で同じ漢字の語彙であってもそれが示す内実は異なるというような概念です。愛人という漢字は日本語では[アイジン]と発音し、配偶者以外の親しい間柄のある種の人を、朝鮮語では[애인]と発音し、日本語でいう恋を、中国語では[airén]と発音し、配偶者を意味するということはよく知られています。また、朝鮮語の門[문]を[モン]と訳す方はおられないでしょう。しかし、애인を愛人とは訳さないにもかかわらず、 한국어は韓国語と訳してしまうのはなぜでしょう。日本語と朝鮮語でのこの言語の言語名を組み合わせて=か≠で結び、?をつけたものを眺めてみましょう。

한국어=조선어?	한국어≠조선어?	한국어=韓国語?	한국어≠韓国語?
조선어=朝鮮語?	조선어≠朝鮮語?	한국어=朝鮮語?	한국어≠朝鮮語?
조선어=韓国語?	조선어≠韓国語?		

¹⁷ 内山(2004)

¹⁸ 永原 他(2020)

¹⁹ 日本韓国語教育学会ウェブサイト <https://jakle.jp/> (2025.3.2 最終接続)

いま、みなさんが自身の頭や心の中でどのようなことが思い浮かんでいるでしょうか。

(3)自称と他称の混同²⁰

次に、その呼称が自称なのか他称なのかということも混同されがちです。社会言語学や言語教育の分野では、〇〇人とは誰なのか、〇〇語は〇〇人のものだけではないという議論がありますが、ここではその問題には立ち入らずに話を進めます。この混同からもこれまでに議論の齟齬が生じています。韓国人に朝鮮語と言ったら韓国語だと言われたという日常生活レベルのケースもあれば、以下に挙げる社会的な問題もあります。いずれにせよ、これらは自称と他称の違いを混同することが一因となって起こると言えるでしょう。1つ目は、NHKの「안녕하십니까?～ハングル講座～」が開始される際に番組の名称をめぐって議論が起り、最終的にこのような番組名になったという事例です。これはハングルという呼称が広まった大きな要因ではないかと考えられます。2つ目は、東京外国語大学朝鮮語学科の学科名に韓国大使館から韓国語学科への変更要求があった事例で、これについては東京外大の菅野裕臣先生の回想に「内政干渉」という表現が出てきます。3つ目は、東京大学での科目名の朝鮮語や、部門名も朝鮮文化部門という名称に「韓国側」から配慮要請があり、韓国朝鮮という呼び名が使われるようになったという事例です(4章§3で後述)。4つ目は、最近の話ですが、早稲田大学で科目名の「朝鮮語」が韓国人留学生からの意見によって「Korean」に変更されたという事例で、その報道が韓国のテレビでなされました。在学生へのインタビューなどもありますが、結論ありきで切り取った情報の断片を構成して主張を組み立てた感が否めないように思われます。報道の分野ですから致し方ないということもあるでしょうが、たとえば、画面に朝鮮語と出た後に조선어?と映し出されるといった「漢字の惑わし」が見られますし、意見を提起したのが(한국인 유학생들ではなく)「한인 유학생들」とされている点も興味深いところです²¹。ここ

²⁰ NHKについては、植田(2002:1)・内山(2012:15-18)、東京外大については菅野裕臣「東京外大朝鮮語学科とわたくし」百孫朝鮮語学談義ウェブサイト <http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/misc/togaifr.html> (2025.3.2 最終接続)、東大については内山(2004:104)、「朝鮮語？韓国語？導入へ難問 文部科学省センター、入試の名称選び」『朝日新聞』2001年1月9日夕刊(19面)、早大については、「일본 대학 한국어 열기에도…수업 이름은 ‘조선어’?’ KBS 2024.10.10(KBS News) <https://www.youtube.com/watch?v=lpnCHLgc9q4> (2025.3.2 最終接続)参照。KBS Newsについては、飯倉江里衣先生・高橋梓先生のご教示による。なお、菅野の回想では、この件について、以下の通り「内政干渉」と述べられている。「学科発足時とその後も韓国との交渉に際してずっと悩みの種となったものに学科の呼称問題がある。当時韓国に発送する客員教授の招へい状は駐日韓国大使館で「確認」という手続を事前に踏むことになっていたが、担当科目名が「朝鮮語」と「確認」するわけにはいかないから、「韓国語」に直せと言ってきた。やむなく第1回の日本文の招へい状はその部分だけ Korean Language と記することで折合いがついたが、第2回以降は韓国文を正文とし、日本文はその翻訳ということで学内で決済し、韓国文の当該個所はまさに韓国における朝鮮語表記 hangug'e(韓国語)を用いた。学科発足の初期に客員教授が是非自分のために大使館にいっしょに行ってくれと言う。大使館側は朝鮮語学科を韓国語学科と変更するよう激しく要求した。その話を聞いた当時の庶務課長は韓国大使館側の内政干渉に対してかんかんに怒ると同時に、わたくしが韓国大使館にこのこと出かけたことを批判した。わたくしのところに聞こえてくる話では、日本のさる親韓派国会議員が大学の朝鮮語学科という名称ぐらい自分が韓国語学科と直すよう文部省にかけあうと豪語したらしいが、文部省からわたくしにそんな圧力がかかってきたことは一度もなかつた。その後現実には言語名として朝鮮語のはほかに韓国語、韓国・朝鮮語、朝鮮・韓国語、コリア語、はてはハングル語などというものまであらわれたが、日本は北朝鮮と国交を持った時にはたしてその言語名をどうする気なのだろうか。」

²¹ 한국인・한인・유학생にあたる漢字は、それぞれ韓国人・韓人・留学生。

で挙げた4つの事例は、いずれも日本で日本人一とは誰なのかはおいて一が日本語でこの言語をどのように呼ぶのかということに対し、外部から自称と他称を混同した上に表面的な論理構成で変更を迫るという、知ではなく情による主張という点で共通していると言えるでしょう。併せて、それに対して、4例ともではありませんが、意見提起されて変更した側も、なぜそのような変更を行うのかという論理的根拠をはっきり示していない、すなわち、呼称問題の様々な要因を解きほぐすことなく変更を行っているのではないかという点も指摘できるでしょう。

(4)言語呼称のストラテジーとしての利用

一方、呼称をストラテジーとして利用した例も見られます。神田外語大学の設置申請に際し、文部省が「特に必要と認める」ための切り札の1枚として、設置準備室が韓国語という呼称を利用したというケースです。このことは、同学元学監の回想で明らかにされています²²。韓国語とついた学科などのセクションはおそらくこの神田外語大学が最初ではないかと思われます。

(5)「総合的朝鮮観」の希薄化

植田(2002)では総合的朝鮮観という概念を提起しました。そこではこの概念を「言語・文学・歴史等のいわゆる研究や交流において、たとえ国家を単位として対象とするにせよ、韓国のみ、あるいは共和国のみを見るだけでは、一面的な把握しかできず、南北朝鮮はもとより、海外にも渡る朝鮮文化圏を一体のものとして捉え、その枠組みの中でそれぞれを捉える必要がある。このような視点を「総合的朝鮮観」と呼ぶことにする。」と定義しました。これに対する概念としては、「分断的朝鮮観」と述べています。

近年は、韓国への関心が大いに高まり、いわゆる「韓国文化」が日本社会で親しまれるようになりました。そして、「韓国語」という呼称を所与のものとしてとらえる世代が活躍するようになっています。ここ数年は行っていませんが、従来、毎年1年生の最初の授業で、簡単なアンケートを取っていました。南北朝鮮の正式国名(日本語+英語)、首都、おもな都市、知っている人、知っている文学作品・作家、韓国と言えば?・北朝鮮といえば?などを答えるものでした。ここからは、南北間の不均衡な知識のほかに、分野による不均衡も見られました。現在やってみれば、文学作品名など現代韓国のは割と挙げられそうですし、また違う結果も出るだろうと思います。とはいえ、植民地時代の文学などについては変わりはないのではないかと思います。とりわけ、高等教育における第2外国語という位置づけで朝鮮語を学ぶ際、関心を深めるとともにより広げることにつながるのが総合的朝鮮観ではないかと思います²³。

ここで興味深いことは、教科書に示された地図には朝鮮半島全体が書かれている場合が少くないことです²⁴。このような現象は雰囲気としての、「朝鮮半島で用いられている言語」観と言えるかもしれません。なぜ朝鮮半島全体の地図を示したくなるのでしょうか。「『韓国のことばだから韓国語』であれば、軍事境界線以南の地図でいいように思うのですが……。」というの

²² 「第12回 山本和男神田外語大学元学監 大学設置という重い扉を開け放つ」神田外語グループウェブサイト インタビュー「いしづゑを築く～神田外語とともに歩んできた人々の証言～」
https://www.kandagaigo.ac.jp/memorial/interview/12/interview_12_1.html (2025.3.2 最終接続)

²³ 塚本 他(1996)では、総合的朝鮮観などのいくつかの観点からの試みを行った。

²⁴ 植田(2021)参照

は私の疑問です。

§ 4 さらに考えるための手がかり

(1)語の多義性

植田(2002)で希薄であった視点で、内山(2004)で指摘された点は、語の持つ多義性ということです。つまり、[かんこく]という語=音は「韓国料理」という例が示すように総称としてのKorea(n)を、「韓国の国民」という例のように大韓民国の略称という2つの意味を持っているわけです。また、[ちょうせん]という音も同様に「朝鮮半島」ではKorea(n)を、「李氏朝鮮」—最近は「朝鮮王朝」という場合が多いですが—では、かつての王朝名という2つの意味を持っているわけです。ここで注意すべき点は、内山も指摘するように、朝鮮だけでは朝鮮民主主義人民共和国の略称として捉えられにくく、地域名の北朝鮮が略称として捉えられる点です。

この点から、日本語での朝鮮語はKoreaの語、韓国語もKoreaの語ということになります。

(2)韓国人の南北朝鮮観の変化

以前の韓国人は日本語では北韓[ホッカン]という場合がほとんどだったよう思います。KBSの日本語放送でも「北韓の実情」という番組がありましたし、いまでもKBSでは北韓と言っているかと思います。しかし、最近では、北朝鮮[キタチョウセン]という韓国人が多いように感じています。ここでは日本語の習慣に合わせてくださっているのかはわかりませんが……。また、朝鮮語の世界でも以前は^北한に対しても^南한だったのが、最近では한국が用いられることが多いように感じています。これについてはきちんと調べる必要がありますが、このような韓国人の南北朝鮮観の変化というのも念頭に置く必要があるように思います。

(3)ことば(人付き合い)のマナーとその双方向性

植田(2002:13)では「ことばの(人付き合い)のマナー」という視点も提起し、「朝鮮」ということばを「チョーセン」という形で蔑称として日本人が朝鮮人に対して使い、また、現在でも使われることが少なからずあるという事実も存在する。さらに、近年の国際情勢の変化もあって、いくぶん状況に変化が見られるというものの、韓国では朝鮮ということばに対して、植民地時代のそのような経験に加えて、共和国との関係から不快感を持つ人もいるという事実がある。このような点には状況に応じて配慮するということは当然であるが、いわば「ことばの(人付き合い)のマナー」に属する問題であり、本稿の対象外の問題である。」と述べました。

その後、内山(2004:104)では「しかし配慮というものは双方向的になされるべきものであろう。「ちょうせん」が「チョソン〔朝鮮〕」であるとの事実誤認にもとづいて名称の変更を要求するのは、他者への配慮に欠けた態度だと筆者は考える。」と指摘されており、前述の自称と他称の問題ともつながってくることになります。

(4)既存概念の再検討

時代の変化によって、既存概念にも再検討を行う必要があるかもしれません。

たとえば、始めのほうで言及したことばと国家の関係についてです。つまり、「朝鮮半島には、その政治的境界線を問わず一つの民族によって一つの言語が話されているという認識に立つならば、これを朝鮮語と呼ぶのは自然である。それに対して、韓国語という国家を単位とする

言語の呼称を設けることは、朝鮮半島全域におよぼすはずの言語を一つの国家だけに限定し、ことによると国境外にもはなされている同一の言語を排除することになる点でふさわしくない。」²⁵という考え方があります。しかし、ここで「韓国」の多義性—おそらく近年より強化されたであろう「総称としての韓国」を念頭に置けば、再検討の余地もあるでしょう。

次に、「本書は『表現が広がるこれから朝鮮語』を改題し、新たにCDを附加したものです。日本では学術的には「朝鮮語」を用いるのが主流ですので、本書中では「朝鮮語」を用いています。」²⁶といった、学術的には朝鮮語という根拠が近年説得力を失いつつあることです。科研費のDBやCiNiiで検索すれば、学術的な論考でも韓国語が主流になりつつあることが示しています。もちろんここには、「『韓国語所与のもの』の世の中化」という要因があるでしょう。

3章の最後に、これまで見てきたさまざまな事柄を念頭において、情ではなく知で以下の引用を見てみましょう。

「7)朝鮮半島の大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で主として使われている言語の呼称については、議論があります。日本では「韓国語」「朝鮮語」「コリア語」「ウリマル(我々のことば)」などが使われています。NHKの講座では「ハングル講座」という名称です。多くの語学テキストは「朝鮮語」「韓国語」「ハングル」が混在しています。大学入試センターの試験は、2001年に「朝鮮語」から「韓国語」に名称変更しました。韓国と北朝鮮の言語は、それぞれの国の言語規定によって語彙、文法、正書法などにかなり相違点があり、日本で学ばれているのは多くが「韓国語」だという認識だからです(金2004)。ここでは、特に政治的な意味はなく、暫定的に「コリア語」と呼びます。」(有田2024:149)²⁷

いかがでしょうか。韓国の「言語規定」に基づいているので韓国語である、また、コリア語には政治的な意味はないというのも従来しばしば行われてきた主張でしょう。

4. おわりに—知と情の相克を越えるために—

§ 1 相克の発生

3章末の引用を見る際、「情ではなく知で以下の引用を見てみましょう。」といいました。図1は、呼称問題で、知の世界の話と情の世界の話が交わり、その部分で議論の土俵の食い違い、齟齬が生じ、そこから相克に至るということを表しています。情というのは個々人のアイデンティティのほか、好みなどにもおおく影響される世界でしょう。この問題を考える際には、いつ、どこで、誰が、誰に、どの言語で用いる呼称なのか?ということをしっかりと認識して考える必要が

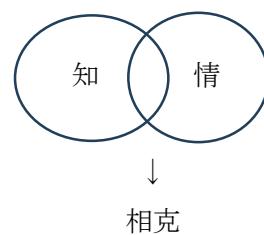


図1 知と情の相克

²⁵ 田中(1981:14)

²⁶ 権在淑(2007:標題紙裏)

²⁷ 「7)は「次はコリア語(韓国語／朝鮮語)²⁷を見ましょう。」の注7の意。なお、センター試験の科目名は当初から韓国語であり、金泰虎(2004)[「日本における「朝鮮語」の名称」『言語と文化』8、甲南大学国際言語文化センター、202頁]の内容を読み誤った記述と思われる。

あるということになるでしょう。

§ 2 教育という営為

ことに教育という場においてのことを最後に考えてみましょう。

社会学者のマックス＝ウェーバーは次のように述べています。

「(略)もし講義のなかで、したがって教室で、この種のことばを使ったならば、それは許すべからざる乱用であろう。教室ではたとえば「民主主義」について語るばあい、まずその種々の形態をあげ、そのおのがそのはたらきにおいてどう違うかを分析し、また社会生活にとってそのおのがどのような影響を及ぼすかを確定し、ついで他の民主主義をとらない政治的秩序をこれらと比較し、このようにして聴講者たちが、民主主義について、各自その究極の理想とするところから自分の立場を決める上の拠りどころを発見しうるようになるのである。(略)」「(略)予言者や煽動家は教室の演壇に立つべきではないからである、と。」(ウェーバー 1936:48-50)

10年ほど前から、毎年4月にこの本を読みなおして自戒し、また大学院の1年生の授業でも触れるのですが、教員・教師は学び手が考えるための材料を提供するものであって、主義・主張に誘導する存在であるべきではないという風に私は読んでいます。さらに、教室というマクロな権力が働く場ということにも注意が必要でしょう。

§ 3 考えるこという営為

最後に次の引用を見てみましょう。

「東京大も頭が痛い。昨年六月にソウル大との間で、互いの地域研究強化を約束。教養学部の「朝鮮語」や、文学部大学院の「朝鮮文化部門」を拡充する予定だが、韓国側からは「名称にも配慮を」との声が届いている。／ある東大教員は「もめないような名前をセンター試験で考えてくれれば、東大も楽なのだが……。」(前掲「朝鮮語？韓国語？導入へ難問 文部科学省センター、入試の名称選び」)

この、考えてくれれば楽なのだがとされる発言は、マスコミのフィルターを経ていますし、シニカルな含意があるのかもしれません。ですから、文字どおりというわけではないかとも思います。仮に文字通りとったならば、考えることを放棄しているということになってしまふからです。

教育や研究という営為は考えるということが根本になるのではないかと思います。

今日のお話が、みなさんお一方お方が考えるという営為を行う材料になればと思います。

参考文献

有田佳代子(2024)『移民時代の日本語教育のために』くろしお出版

ウェーバー、マックス／尾高邦雄 訳(1936)『職業としての学問』岩波書店 [2014年94刷]

植田晃次(2002)「言語呼称の社会性－日本語で朝鮮語、韓国語、ハングル…と呼ばれる言語の呼

称再考－」『社会言語学』2、「社会言語学」刊行会

植田晃次(2007)『日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次(科研費研究成果報告書)

- 植田晃次(2012)「批判的社会言語学からの接近」野間秀樹『韓国語教育論講座』2、くろしお出版
- 植田晃次(2014)「金島苔水とその著書」李東哲『日本語言文化研究』3(上)、延辺大学出版社
- 植田晃次(2016)「中国刊行朝鮮語文法書書目」『言語文化学』25、大阪大学言語文化学会
- 植田晃次(2018a)「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語」李東哲・安勇花『日本語言文化研究』5(下)、延辺大学出版社
- 植田晃次(2018b)「中国朝鮮語の規範化方針の転換の軌跡とその可能性」『批判的社会言語学のメッセージ(言語文化共同研究プロジェクト 2017)』大阪大学大学院言語文化研究科
- 植田晃次(2021)「朝鮮語テキストの地図小攷」『批判的社会言語学の対話(言語文化共同研究プロジェクト 2020)』大阪大学大学院言語文化研究科
- 植田晃次(2022)「朝鮮語テキストの言語呼称小攷」『批判的社会言語学の深化(言語文化共同研究プロジェクト 2021)』大阪大学大学院言語文化研究科
- 植田晃次(2024)「近現代日本で出た朝鮮語教科書類目録」科学研究費基盤(B)「異文化理解における外国語教科書の役割——中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として——」成果報告「日本近現代ロシア語・中国語・朝鮮語教科書類リスト～2022年までー」
<https://www.lang.osaka-u.ac.jp/~genbunrus/database%20menu.htm>
- 内山政春(2004)「言語名称「朝鮮語」および「韓国語」の言語学的考察」『異文化』5、法政大学国際文化学部
- 内山政春(2012)「「朝鮮」と「台湾」」『異文化 論文編』13、法政大学国際文化学部
- 内山政春(2022)「固有名詞の「自称」と「他称」」『異文化 論文編』23、法政大学国際文化学部
- 金成樹(2025)「13歳からの朝鮮入門 vol.14」『月刊イオ』345、朝鮮新報社
- 權在淑(2007)『表現が広がるこれからの韓国語』三修社
- 斎藤真理子(2024)『隣の国の人々と出会う』創元社
- 田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波書店
- 塚本秀樹 他(1996)『グローバル朝鮮語』くろしお出版
- 永原歩 他(2020)『韓国語 I(20)』放送大学教育振興会
- 矢野謙一(2012)「日本における旧朝鮮語学」李東哲・權宇『日本語言文化研究』2(下)、延辺大学出版社

付記：本稿は JSPS 科研費 23K00745 による成果の一部である。なお、それ以前の科研費 (17320085・20320081・23520671・26370726・18K00782) で得た知見も含んでいる。また、大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻の研究倫理審査で承認された研究の一部である（研企 B-3 「「旧朝鮮語学」と 20世紀後半の朝鮮語教育から見た日本近現代朝鮮語教育史の研究」、2024年10月9日承認）。